No.50

HO KKAIDO 建築士会 女性委員会

祝!!　女性委員会広報誌　No.50

遠い記憶をひも解き、創刊当時の様子やこれまでのことを書いてみようと思います。私の初めての士会活動は、1987年の「たまり場調査」でした。女性会員で調査活動するのに参加しないかとお誘い頂き、楽しそうなので大通公園での聞取り調査に参加しました。まだ25歳だった私は、こんなにパワフルで魅力的な女性達が業界にいて、同じ目的に向かって行動を共にしている事に、驚きと感動を覚え、それから日々の仕事に対する姿勢や覚悟が大きく変化しました。1991年女性の活動を伝える広報誌が発行される事になり広報担当として参加しました。タイトルのロゴは活動的に飛び跳ねる女性をイメージしました。

見開きの頁はブロックお任せコーナーとし、この欄をきっかけにブロック内の交流を図るのが目的でした。配布方法は、月刊誌に同封ではなく単独で郵送し印象付けを図り、厚みのある色用紙を使い穴も開けておくことにより保管しやすくしました。編集作業は通常勤務終了後、原稿の切貼りに始まり宛名書きまで全て手作業です。作業量は多く大変でしたが、皆で時間を共有している充実感と楽しさでとにかく笑って作業していたと記憶しています。今でも鮮明に覚えているのは広報誌を女性会員の手元に届ける意義について話し合った事です。

〔全道には、身近に話の出来る女性技術者のいない人や仕事を続けられない状況の女性も多いだろう。男社会で働く難しさや、心細さ、スキルアップの機会の少なさを感じている人もいるだろう。広報誌によって横のつながりができ、仲間ができ、その事がこの業界で頑張る力になるのではないか。〕という様な内容でした。

一年が年々短くなるのは年令のせいでしょうか。あっと云う間でした。あまり良い事のなかった社会状況でしたがとにかく20世紀も終りです。21世紀の足音が聞こえてくる今、何を考えますか？21世紀は情報社会がより進み人が見えにくくなるかも知れません。流されないようにしっかり地を踏みしめて進みましょう。

50号までの間に、私は士会活動とは無縁の専業主婦期間が５年ほどありました。その間届く広報誌を見ながらいつか又この活動の場に戻りたい、又業界で仕事がしたいと強く思っていました。再び士会活動と業界に復帰し、今50号記念の原稿を書いている自分を不思議に思うと同時に、活動再開へのきっかけをくださった諸先輩へ感謝の気持ちで一杯です。現在は「北海道建築士」に掲載されるようになり内容も変化してきましたが、当初の意義は受け継がれていると思います。時代は変わり女性技術者の比率も高くなり立場も、背負う責任も変化して来ました。建築士会は、今の自分の状況に合わせ、それぞれが、その時々の活動ステージを選ぶ事が出来ます。焦らず過度な無理はせず、でも意欲を持って活動し、得た物を社会に還元して行こうと思います。

（札幌支部　工藤美智子）

会誌提供者　早川委員長

「振り返って思う事」　小形孝子

私は、望んで住宅設計に関わって来ましたが、体調を崩し、結婚と同時に仕事を離れました。その後、仕事をしたいと考え一歩踏み出した時、仕上材、公庫仕様への変化に驚き、大変だった記憶があります。細くても長く関り続ける事は、進めます。家事、育事との両立、やはり悩む時があると思いますが、自宅に居ても出来る仕事は、沢山あると思います。親の後姿は見ていますし、孫達もその事も学び、成長に繋がると考えます。
ここ数年は親の介護、子供の出産に関り、私の還暦を節目に仕事を卒業する事に致しました。
「人は、生れる時と死ぬ時、必ず誰かの手カツ必要!!」と言う言葉、かある様に、今、振り返えると家族に必要とされている充実感は、ありました。
最後に、建築の仕事をする上で、皆、考え方はそれぞれあると思いますが、自分の気持ちの切り替え方、時間の上手な配分等を考えて、好きな仕事の為、前向きに頑張ってほしと思います。心と身体も健康で……

この先の50号へ

この50号記念を発行するにあたり、今までの広報誌に目を通しました。ちょうど20年前に発行された手書きの広報誌には、建築の事、地元のイベント情報や料理の作り方、会員のプライベートまで…様々な内容が盛り込まれた温かい内容ばかりでした。

手書きの文字やイラストで構成され、お会いしたことがなくても人となりがわかり、親近感が沸き、自分と重ね合わせ励まされていた女性はたくさんいたのだろうと思います。今回、私のわがままで支部のＯＧである小形さんに手書きで原稿を書いてほしいとお願いしました。士会の活動をするようになってから何度かお食事をしたり、ご自宅にお邪魔したりして、小形さんの歩まれてきた道のりを聞く機会があり、子育て・仕事・介護に一生懸命向き合ってきたことを明るく話して下さいました。

■編集後記■

まずは初回、釧路にしてはめずらしく暑い夏の夜。とあるところに集まり、編集開始。仲間との共同作業を通してよりいっそう連帯感がわいてきた様な気がします。

地方にいると、身近に建築をやっている先輩や同僚がいるのが少なく、親や友人にもなかなか心から理解してもらえない葛藤や悩みをわかってくださり、本当に励ましてもらいました。今よりは色々な意味で働く環境が整っていなかったはずなのに、それぞれに全力投球で取り組んできてくださっていた事が今の私達やこれからの建築女子の道につながっている事を心から感謝したいと思います。

また納涼会の席で、初代委員長持田さんにこの女性委員会の活動に参加することの大切さを教えてもらいました。積極的に関わっていくことによって、道内各地に知人友人が出来、自分の知らない知識を教えてもらったり、その逆もあると…自分ひとりでは何も出来ないのを痛感している昨今、この言葉が身にしみました。

実際に高齢者の方や患者さんと向き合っている方々の、生きた意見に自分の活字からだけの情報で理解していたような気になっていたことも反省してしまいました。いろんな事に関して異業種間のネットワークって大切ですね…。

建築を取り巻く環境は、年々悪化してゆく傾向にあるのですが、建築を志す若者が後を絶ちません。建築には夢がある、文化を創るパワーがあるのだと思います。就職難で必ずしも全員が建築関係に進める訳では無いのですが、あきらめないで欲しいなと思います。

そしてこの若者達のために自分は何ができるだろう。出来れば、先輩達から受け継いだバトンをただ渡すのでは無く、よりよい環境にして引き継ぎたい…

「環境の子供の生活には多くの問題のあることを感じている人も多く、子供にとっての住環境を、建築士の視点を通して考える必要性を理解していただけたと思います。家は子供にとって、未来のふるさとになるよう、楽しい思い出の残る家造りをしなければならないと思いました。」

この広報誌も順調にゆけば、後10年弱で100号に達します。その頃の建築はどうなっているのでしょうか。建築士として求められている姿はどんなものなのでしょうか。建築士会の長所でもある『つながる力』が大いに発揮され、全道各地、それぞれの場で生き生きと活躍してくれていると信じます。日々の生活に追われて、なかなか未来へ思いをはせることが無いですが、自分の今のあり方が、未来へとつながってゆくのだと思うと気持ちが引締ります。最後に50号まで続けてこれたのは、歴代の委員長様はじめ各委員の努力なしでは、達成できなかったことを改めて感謝いたします。本当にありがとうございました。

（室蘭支部　吉田　幸恵）

★会報作成後の飲み会が楽しみで…これで終わりかと思うと、少々淋しいデス。（N.Y）